

特定質問2：「現象-外」における現象と思考の破綻について

林 淳

『現象-外：Hors phénomène』では、病や離別、子どもの死、自然災害、パンデミックなどのトラウマティックな場面について、とりわけその場面を生き延びる自己の在り方が粘り強く考察されています。私自身、ジョルジュ・バタイユを研究している身として、この考察が非常に印象的でした。ご存じの通り、バタイユもまた、自己が自己として生きることの不可能になるような体験を「内的体験」と呼んで探求しているからです。

私にご質問したいのは、その「現象-外」の場面と、本書で言うところの「思考の無の経験」と呼ばれるものの関係についてです (p. 155)。最初に問いを定式化しておくならば以下のようになります。すなわち、現象の可能性の条件が破壊されることと思考の可能性の条件が破壊されることは同じ事態を表していると考えて良いのでしょうか、という問いです。

「夜」や「無」という対象についての現象学ではなく「現象学それ自体の夜」について語る文脈で、ファルク先生は「現象-外は現象それ自体の超越論的な条件を破壊する」と述べており (p. 65)、現象を受け取る可能性それ自体が破綻する場面として「現象-外」を捉えています。さらに「現象-外」が「自己の外」と「世界の外」を意味する」と説明されていることから (p. 105)、それは世界の内に位置を持たない場面、自己そのものが成立しないような場面であることが分かります。こうした「現象-外」を記述することは、本書を貫く課題の一つだと思います。

第三章「思考不可能なもの」でファルク先生は、思考することそれ自体に焦点を当てながら、この「現象-外」の内実を別様に問い直しています。そこでは未だ思考されざるものではなく、原理的に思考不可能なものに思考を向ける可能性が論じられています。私たちが「考えられない！ (C'est impensable !)」と言うとき「事故」はすでに起きている、という洞察から、ファルク先生は、その「事故」を前にして思考は歯が立たないというだけではなく、その「事故」を思考しようとすること自体が思考する当人を傷つけると考察しています (p. 154)。このことは「思考を生産する条件それ自体が無化される」場面として捉えられ (p. 154)、この「思考不可能なもの」という主題についての犀利な分析はさらに続いています。

ファルク先生は「現象-外」が極限に達するところでは、私はもはや、あるいはそもそも、私の病に苦しんでおらず、私を分離された存在として認識してもいない〔……〕最後には「思考不可能性」だけが残る」と考えています (p. 152)。すなわち、自分の経験を自分のものと見なす認識が成立していないような、思考の条件そのものが破綻して「思考不可能性」だけが残される場面は、少なくとも、そこでは自己自身として生きられないという意味で「現象

-外」と重なるのです。このように、ファルク先生は自己が自己として生きられない場面に、現象と思考、両方の可能性の条件の破綻を重ね見えています。

このように解釈して、私は上述のご質問を提起しました。改めて言えば、現象と思考の可能性の条件の破綻は、どのような水準において重なり合い、区別されるのでしょうか、あるいは同じ内容を言い表しているのでしょうか。

この問題に関連して、『現象-外』からとても示唆深い一節を引用させていただきます。曰く「「無」についての思考（生きている間の死）よりも悪いことがある。それは「思考の無」を経験すること（死んでいるかのように生きていること）である」（p. 155）。この「死んでいるかのように生きている」という言葉に注意を向けるとき、私たち読者は「現象-外」について、ファルク先生がそこに含意させたものをもう一段深いところから汲み取って再考することができるのではないのでしょうか。そう考えた次第で、このある種の死の経験を頭に入れながら、ファルク先生のご回答を伺いたいと思います。